

ルイス流の可能世界を還元する

小山 虎 (Tora Koyama)

慶應義塾大学非常勤講師

デイヴィッド・ルイスが提唱した極端な様相実在論 (modal realism) は、そのあまりの信じがたさのゆえにほとんど受け入れられていない。だが、その一方で、これまでに提案されてきた代替説はどれもルイスの様相実在論より多くの問題を抱えているということも多く論者によって指摘されている。要するに、様相実在論に対する反論には、その信じがたさに訴える以外には、まともな反論が存在しないというのが実情である。本発表では、可能世界を存在論的に還元することにより、様相実在論をその信じがたさに訴えずに反論することを試みる。

様相実在論を支持するルイスの議論は、おおよそ次の二つの主張から成る：

- 1) もし可能世界意味論が様相概念の正しい分析を与えるのであれば、「可能世界」と呼ぶものが存在していなければならない。
- 2) 「可能世界」とは何かを説明する理論のなかで最も優れたものは、可能世界を具体的な存在者とする理論である。

つまり、ルイスは、可能世界意味論が様相概念の正しい分析を与えるとは主張していないものの、自分の様相実在論は、様相概念を分析するためには最も優れた理論であり、よって受け入れるべきであると主張しているのである。

この議論に対し、多くの論者は 1) を受け入れた上で 2) を否定する、すなわち、可能世界をもっと受け入れやすいかたちとして規定しようと試みてきた。その代表例は、現実主義 (actualism) である。現実主義によれば、可能世界は現実に存在するものから構成される抽象的対象だとされる。つまり、現実主義は、可能世界をある種の抽象的対象へと還元する立場であると言える。

一見したところ、これは非常に魅力的な立場に見える。だが、実際には現実主義が成功する見込みはほとんどない。なぜなら、現実主義者が可能世界をどのように構成するにせよ、そのためには何らかの様相概念に用いなければならないことが知られているからである。可能世界が様相概念を用いて構成されるのであれば、可能世界意味論による分析は様相概念の分析としては循環していることになってしまう。

一方、ルイスの議論の 1) を否定する方針の代表例は、可能世界意味論による分析を虚構として解釈するものである。これは虚構主義 (fictionalism) と呼ばれる。だが、虚構主義には、その「虚構」が意味することを厳密に定式化しようとしたら結局様相概念に訴えることになるという問題点がある。

また、1) と 2) の両方を受け入れつつ、結論である様相実在論を受け入れないことも不可能ではない。単に 1) の前件 (可能世界意味論が様相概念の正しい分析を与えるこ

と)を否定すればよい。こういった方針のなかでも、様相概念の正しい分析は様相演算子によって与えられるとする立場は、様相主義(modalism)と呼ばれる。

現実主義や虚構主義の問題点を考慮すれば、様相主義は魅力ある立場のように思われるかもしれない。しかし、様相主義にも大きな問題がある。通常の様相演算子だけを含む言語の表現力は可能世界を量化の対象に含める言語の表現力よりも弱い。すなわち、後者の言語の文のなかには、前者では表現できないものがあるのである。これは、様相主義は可能世界意味論の成果をそのまま引き継ぐことができないということを示唆している。

このように、ルイスの議論に反対すると、結局はより大きな問題を引き受けることになってしまうように思われる。したがって、様相実在論がこれまで知られている理論のなかで最も優れた理論であるという主張は正しいように思われる。

しかし、だからといって、われわれには様相実在論を受け入れる以外の道が残されていない訳ではない。可能世界を存在論的に還元することができれば、1)と2)を受け入れても様相実在論を受け入れなく済むからである。

可能世界を存在論的に還元するという目的からすれば、様相主義は大いに示唆的である。可能世界意味論は、形式的には、様相論理の文の必要十分条件を可能世界への量化を含む文によって与える理論である。様相主義のように、これを様相概念の分析を与えるものではなく、可能世界への量化を含む文と様相論理の文との翻訳関係を与えるものとみなせば、可能世界意味論により可能世界を様相論理に還元するという道が開かれる。

このような方針に対しては、ふたつの疑念が考えられる。ひとつは、現実主義に関するものである。現実主義も同じように可能世界を還元しようとしたが、成功しなかった。現実主義と同じ轍を踏まずに可能世界を還元することは可能なのだろうか。

だが、現実主義が失敗したのは、可能世界意味論が様相概念の正しい分析を与えるとしており、このことにより循環が生じてしまうからである。様相主義のように、可能世界意味論が様相概念の分析を与えることを否定すれば、循環は生じない。

もうひとつの疑念は、様相主義に関するものである。様相主義の問題点は、可能世界への量化を含む文のなかに、通常の様相演算子だけでは表現できない文があった。つまり、こういった文は様相論理の文への翻訳できない。したがって、そもそも可能世界を様相論理に還元することはできないのではないだろうか。

だが、これは、存在論的還元を理論間の還元と同一視する偏った見方に基づいている。ラッセルの記述の理論に代表されるように、存在論的還元は単なる翻訳を与えることではなく、実際、翻訳を与えることは存在論的還元の必要条件ですらない。このように存在論的還元を単なる翻訳から切り離して考えれば、可能世界を存在論的に還元することは十分可能だと思われる。